りっとう再発見

211 東と西の”目川村“

▲小槻（おづき）大社の祭礼当日、専光寺での花笠踊り

現在の”大字（おおあざ）“（栗東市○○■番地、栗東市●●□丁目の○○や●●の部分）は、基本的には江戸時代の村の範囲を引き継いでいます。しかし、中には明治7年（1874）の合併によって成立した村を起源とする大字もあります。御園（金勝中＋上山依）・高野（小坂＋土＋今里）・目川（東目川＋西目川）・上鈎（上鈎＋寺内）・苅原（半苅＋市川原）がその事例です。今回は、東目川村と西目川村について取り上げます。

現在は市内でも有数の人口増加地域となっている目川ですが、もともとの街並みは東海道沿いに固まっており、周辺には田地が広がっていました。そのような目川の景観が形作られた江戸時代に、この地域を東西に分けるとすれば、まず中心に線を引き、坊袋側（東）と岡側（西）に分けるという方法が思い浮かびます。あるいは、東海道を坊袋側に向いて右側を東、左側を西というように、東海道を挟んで東西に分けるという方法もあるでしょう。

ところが、明治5年（1872）に県内各地の社寺の状況を調べた資料では、東目川村に専光寺、西目川村に地蔵院がそれぞれ所在するとされており、専光寺が西、地蔵院が東にある実際の位置関係とは逆になっています。また、東海道を坊袋側に向いた場合、専光寺も地蔵院も左側にあるため、東海道を挟んで東西に分けたということでもなさそうです。

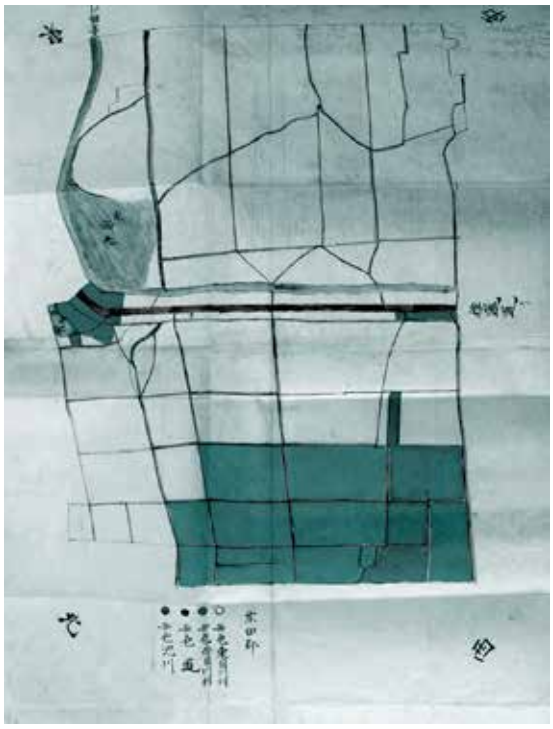
このように、東目川村と西目川村の境界については、これまではっきりとしたことは分かっていませんでした。しかし、栗東歴史民俗博物館で開催中の小地域展「目川の歴史と文化」に向けた資料調査で、両村が合併する直前に描かれた絵図が、滋賀県立公文書館に残されていることが明らかとなりました。その絵図には、東海道の両端（坊袋・岡それぞれとの境界付近）と、小柿と接する付近の田地が、西目川村の範囲として示されています。

東西それぞれの目川村が、江戸時代にどのように運営されていたのかは明らかではなく、地元の伝承等も残されておりません。かつてあった村々のすがたを伝える貴重な資料を、この機会にぜひご覧ください。

問 歴史民俗博物館
TEL 554-2733
FAX 554-2755

■小地域展
「目川の歴史と文化」
会期　5月11日(日)まで

※詳細はお知らせ版8ページをご覧ください



▲東目川村と西目川村の範囲を示す絵図（濃い色が西目川村）
（滋賀県立公文書館蔵『滋賀県行政文書』明-へ-62 2-6）

▲地蔵盆当日の地蔵院